

『清書対音協字』における漢字音(2)

鋤田智彦

4. 韻母について

続けて『清書対音協字』における韻母表記について見てみたい。韻母表記をまとめると以下のようなものである(//の中は音韻表記, その右は例字及びその満洲文字表記)。

/a/ 馬ma	/ia/ 家giya	/ua/ 花hūwa	
/ə/ 徳de	/iə/ 謝siyei	/uə/ 国guwe	/yə/ 絶jiwei
	/io/ 学hiyo	/uo/ 果g'o	
/ai/ 在dzai	/iai/ 皆giyai	/uai/ 懷hūwai	
/au/ 曹tsoo, 豪hao	/iau/ 妙miyoo		
/ei/ 雷lei		/uei/ 水sui, 忽hūwei	
/əu/ 走dzeo	/iəu/ 酒jio		
/an/ 班ban	/ian/ 先siyan	/uan/ 関guwan	/yan/ 全ciowan
/ən/ 門men	/iən/ 林lin	/uən/ 孫sun, 蓀suwen	/yən/ 群giyūn
/aŋ/ 康k'ang	/iaŋ/ 将jiyang	/uaŋ/ 双śuwang	
/əŋ/ 登deng	/iəŋ/ 京ging	/uəŋ/ 龍lung	/yəŋ/ 兄hiong
	/i/ 西si	/u/ 古gu	/y/ 徐sioi
/ə/ 二el	/i/ 資dzy, 知jy		

現代北京語との共通性は高いが、一方でそれとの差異もいくつかの点において見られる。以下に具体的な字音を取り上げ詳細に見てみたい。

4.1. 蟹摂二等開口牙喉音字について

現代北京語との違いの一つが、蟹摂二等開口牙喉音字におけるiaiという音である。この音は現代北京語において比較的近年まで保たれており、例えば『汉语方音字汇』では北京音系の紹介において、iaiという音節を載せ、実際に「崖」についてiaの他に旧音としてiaiという音を記録している。ただ、このように「旧音」として残り、挙げられたのはこの一字に限られる。時代をやや遡り『北平音系十三韻』(1937)を見てみると「崖」の他に「厓」「暉」を収めており、これらの字には現在の発音であるiaという音はみられない。なお、『北平音系十三韻』でも「涯」はiaである。零声母以外の字にはiaiという韻母を持つ字が見られず、この韻母は零声母においてのみ残っていたことがわかる。現代北京語では零声母以外の字は「皆」「街」「蟹」など主母音と韻尾があわさりieへと変化した字がほとんどであり、一部の「楷」「駭」などが

介音のないaiと発音される。一方『対音協字』では零声母以外の声母においてもiaiという音が見られる。以下に『対音協字』における表記を見てみたい。

表26 蟹撰二等牙喉音字¹⁾

対音協字	漢字	現代北京音
yai	崖	ia
	隘挨	ai
ai	崖隘矮	ai
giyai	戒解芥介皆誠階塔街	tcie
kiyai	楷	k ^h ai
hiyai	蟹諧械懈鞋	cie

『対音協字』でgiyai, kiyai, hiyaiという音で表される各字はいずれも蟹撰二等字であり、これらが他の音で収められることはない。極めて規則的な対応を示す。それに対して零声母字はやや複雑である。これらの字における他資料での様子を見てみたい。

表27 零声母字

漢字	対音協字	四声通解	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(132) 崖	yai, ai	ia, iai, 俗ai	ia, ai, iai	ia, iai	yai	ia, IJiai
(133) 隘	yai, ai	'iai	ai	iai	yai	ai
(134) 挨	yai	ai	ai	iai	yai, ai	ai
(135) 矮	ai	'iai	ai	iai	ai	ai

『対音協字』には零声母字は合わせて4字現れる。(132)「崖」、(133)「隘」にはyaiの他にaiという音が、(134)「挨」にはyaiのみが、(135)「矮」にはaiのみが見られ、字によるばらつきが大きい。他の資料においても字ごとの違いが現れている。しかしながら全体としてはiaiという音を中心にai, iaという音が見られる、とまとめることができる。『合併字学集韻』では4字すべてにaiが見られ、『西儒耳目資』では4字すべてにiaiという音が見られるのは注目すべきことであろう。これらより古い、元代に編纂された『蒙古字韻』では「崖」など(蒙古字韻)影母字はi介音を持たず、それ以外の牙喉音字はi介音を持つ。ここからもわかるように地域、あるいは時代による差異が大きかったのであろう。そもそも中古二等韻字はi介音を伴っていなかったが、蟹撰のほかに江山効仮咸撰字は後に開口字のうち牙喉音声母に限りi介音が発生した経緯を持つ。このような変化は中国語諸方言の中では珍しいものであり、北方方言の特徴の一つとすることができる。また、蟹撰字について言えば現代北方方言でも西南官話ではi介音が見られない。『対音協字』およびその他の資料に見られる不統一性はそのような複雑な状況を背景にしたものであろう。aiという音はi介音が発生しなかった地域の音であると考えられる。一方のiaという音については異化作用により韻尾が脱落した音であるとも考えられるが、他の可能性も考えられる。王力(1980:153)では見母字「佳」が現代北京語で [tcia] と発音されることと関連して『中原音韻』ではこの字が家麻韻に収められていることを指摘している。他にも『中原音韻』家麻韻には中古蟹撰二等に由来する字として「佳」の他に「涯」が見られる²⁾。『古今韻会举要』では宜佳切には「厓(或作崖)」、 「涯」を、牛加切には「涯」の

1) 表中「現代北京音」では「崖」に対する旧音iaiは省略する。

2) 「涯」「崖」ともに『広韻』では五佳切(佳韻)のほかに魚羈切(支韻)に収める。

み収めており、『中原音韻』の状況と一致する。また、それより後の『四声通解』、『合併字学集韻』では「崖」にもiaの音が見られるようになる。これらからはもともとこのような音で読まれていたということが想定される。いずれにせよ、『対音協字』に見られる数種類の表記は実際の複雑な状況を写し出すものであると言える。

4.2. 曾梗摂合口入声字について

他に現代北京語と異なる点としては、曾梗摂牙喉音、及び山摂知照組合口入声字と宕摂合口入声字を区別することが挙げられる。前者は満洲資料ではuweと表記され、このuweについては、初期有圈点資料である『滿文三国志』では山摂知照組合口入声字は見えず、曾梗摂合口入声字に限られ見られる。例えば「国」はguwe、「獲」はhūweと表記され、宕摂合口入声字である「郭」がg'oと、「霍」がhoと表記されるのとは異なる。この区別は現代では西南官話や中原官話などの一部でも見られ³⁾、歴史的に見れば北京音を示す『合併字学集韻』や南京音を示す『西儒耳目資』でも「国」と「郭」、「獲」と「霍」を別に収めるなど、この区別がより広い地域で保たれていたことがわかる。一方で『対音協字』における表記を観察すると、uweには曾梗摂牙喉音字や山摂知照組字に限らず、宕摂字や、あるいはそれ以外の字も収められており、その区別が曖昧である様子を見て取ることができる。『対音協字』に見られるuweを持つ諸字は以下の通りである。

表28 『対音協字』に見られるuwe (その1)

対音協字	曾梗摂入声	宕摂入声	山摂入声	臻摂入声	仮摂
guwe	国 貌				
kuwe		鞞	濶		
hūwe	或 惑 劃 獲				画
juwe			拙		
cuwe				出	
šuwe			刷		
suwe			説		

上に見える字のうち、guwe「国」「貌」、hūwe「或」「惑」「獲」はこれまでに述べた説明に対応する表記である。曾梗摂入声合口字でありながらg'o、hoと表記される字は見られない⁴⁾。kuweという綴りで収められた「鞞」「濶」の2字はそれぞれ宕摂入声、山摂入声であり共に曾梗摂入声字ではないが、そもそも曾梗摂入声字で、kuweに相当する音を持つ字は『広韻』には見られない。また、『合併字学集韻』ではいずれもk'uoという音であることからk'oという音に収められることが想定される。なぜこの2字がk'oではなくkuweに収められているかについては、この二つの綴りを同音と認識していたという可能性も考えられるが、一方でguwe、

3) 例えば武漢(西南官話湖広片)では「国」[kuv]に対し「郭」[ko]、鄭州(中原官話鄭曹片)では「国」[kue]に対し「郭」[kuo]である。

4) 『対音協字』より後に編纂された『清文啓蒙』では「或」「惑」をhoと表記する(「国」は見られない)。また『御製増訂清文鑑』では「国」はguweと表記されるが、「惑」はhoのみで書かれ、「或」はhoが多数を占め、一部でhūweが見られる。さらに時代が下った『音韻逢源』では「国」はguwe、g'o、goという3種類の綴りをひとまとまりにした音として収められ、完全に合流した様子がわかる(実際にはgoという綴りは漢字音表記ではほとんど使われない)。一方、「或」「惑」はh'o、hoという2種類のみ挙げ、hūweは見られない(実際にはh'oという綴りは漢字音表記ではほとんど使われない)。『御製増訂清文鑑』の状況と合わせてみても、guweとg'oに比べてhūweとhoの合流の方が(少なくとも意識の上では)先行していたと考えられる。

hūweでは区別している様子が見られることから、その理由を断定するのは難しい⁵⁾。その他の juwe, cuwe, šuwe, suweについて、hūweと表記されながら現代北京語で他の字と異なる音で発音される「劃」、仮撰字である「画」もあわせて、それぞれ各種資料における様子を合せて見てみたい。

表29 『対音協字』に見られるuwe (その2)

漢字	対音協字	中古韻母	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(136) 拙	juwe	薛 (山撰)	tʃuɛ	tʃuaʔ	jo	tʃuo
(137) 説 ⁶⁾	suwe	薛 (山撰)	ʃuɛ	ʃuaʔ	šo, šuwe	ʃuo
(138) 刷	šuwe šuwa	薛 (山撰) 鏞 (山撰)	ʃua	ʃuaʔ ʃuaʔ	šuwa	ʃua
(139) 出	cuwe cu	至 (止撰) 術 (臻撰)	tʃ'uei tʃ'ɥ	tʃuʔ	cu	tʃ ^h u
(140) 画	hūwe	麦 (梗撰) 卦 (蟹撰)	xuɛ xua	xuəʔ xua	ho hūwa	xua
(141) 劃	hūwe	麦 (梗撰) 麻 (仮撰)	xuɛ xua	xuəʔ	hūwe, ho hūwa	xua

上の表のうち (136)「拙」、(137)「説」はいずれも薛韻合口字であり、それらは現代北京音では知照系はuo、非知照系はyeと分化し、そのうち前者は宕撰入声、曾梗撰入声、他の山撰入声、果撰などの合口字と合流した。『対音協字』におけるこの2字の表記は『合併字学集韻』『西儒耳目資』と同じく、合流する前の状況を映し出していると考えられる⁷⁾。一方、これより後の満洲資料である『御製増訂清文鑑』では、『清文鑑』において「説」が一箇所のみuweという韻母で表記されるのを除きその他はoと表記され、合流が進み現代北京語に近づいている。

(138)「刷」におけるšuweについても (136)「拙」、(137)「説」と同様に考えることができる。この字については『広韻』に数刮切(鏞韻合口)、所劣切(薛韻合口)の2音が載り、現代北京語でʃuaと発音されるのは、前者に対応する音である。『対音協字』では「刷」はšuweのほかにšuwaも載せ、『広韻』所載の2音にそれぞれ対応している。『西儒耳目資』も同様である。

(139)「出」はこれまでに見た3字とは異なる。『対音協字』にはcuweのほかにcuという音でも収めており、後者は『広韻』の赤律切(術韻合口)、また現代北京音のtʃ^huに対応する音である。『広韻』には「出」のもう一つの音として尺類切(至韻合口)を載せる。この音は『合併字学集韻』に見えるtʃ'ueiに対応するが、満洲文字ではcuiと書かれることが想定され、cuweと符合しない。そのため、cuiとして収めるところをcuweとして収めてしまった可能性が

5) k'oに収められる入声字には「渴」「磕」があり、前者は山撰開口入声、後者は咸撰開口入声由来である。そのため、入声由来字のうち、中古開口入声はk'oへ、中古合口入声はkuweへと分類したとも考えられる。ただ、g'oを見てみると、中古開口入声である「各」「閣」「葛」「鶴」と中古合口入声「郭」が共に見られ、由来の開合を区別していない。

6) 『対音協字』では「説」はsuweの他にloweiという音も収める。これは『広韻』弋雪切に当たる音である。なお、この字が中古書母字でありながらsではなくsと表記される点については、本来であれば声母を分析した3.8で取り扱うべきであったが筆者の不注意により書き漏らしてしまった。『対音協字』については生母字においてはsと表記される字が少なからずみられ、『西儒耳目資』などと共通性が見られたが(3.2参照)、生母字においてはそのような例は多くない。

7) 例えば宕撰入声合口字である「卓」は『対音協字』ではjoであり、同様に『合併字学集韻』ではtʃuo、『西儒耳目資』ではtʃoʔと、薛韻合口字とは区別される。

考えられる。また、もう一つの可能性としては、現代方言に目を向けると、太原(晋語并州片)や長治(晋語上党片)など「出」がこれまで見てきた「拙」や「国」等と同じ声母で発音される地点も存在する⁸⁾。ただ、他の音との整合性を見るに、直ちにこの地域の音の影響であると言うことはできず、参考までに挙げるに止める。

(140)「画」、(141)「劃」は現代北京語でxuaと発音されるためここで取り上げる。『広韻』を見てみると(140)「画」はxuaに対応する胡卦切(卦韻)に「積名曰、画、挂也。以五色挂物象也。俗作畫」とあり、「獲」と同音の胡麦切(麦韻)にも「計策也、分也」とある。そして、(141)「劃」は胡麦切に「錐刀刻」とある。『対音協字』に見られるhūweという音は麦韻の音に対応する。『広韻』では(141)「劃」は卦韻には収められていないが、『合併字学集韻』では(140)「画」については『広韻』胡卦切に対応するxua(去声)「書画、俗」と、胡麦切に対応するxuε(陽平)「計策也、分也」、そしてxuε(去声)「筆画」の3音を載せ、(141)「劃」は『広韻』胡麦切に対応するxuε(陽平)「錐刀刻也、以刀劃破物也」という音の他にxua(陽平)に「刀劃也」を載せる。このように見てみると現代北京語における「劃」のxuaに対応する音は相対的に新しい音であり、『対音協字』では古い音を載せているということが出来る⁹⁾。

4.3. 曾梗摂唇音入声字について

4.2. で述べたことと並行して、唇音字ではeとoが対応する。現代北京語においてoと発音される唇音入声由来字は、『対音協字』ではeとoに分かれる。『対音協字』における字音を表にまとめると以下のようなになる。

表30 『対音協字』唇音入声由来字に見られるeとo

対音協字	曾梗摂入声	宕江摂入声	山摂入声	臻摂入声
be	白北百帛栢			
bo		博剥薄泊亳箔	撥	
pe	迫魄拍珀			
po			潑	
me	麦墨默陌鶩脉脉			
mo		莫	末	沒
fe				拂弗
fo		縛		佛

上の表からは、beとbo、peとpeについてはその由来によりはっきりと区別されている様子がわかる。これもやはり『合併字学集韻』、『西儒耳目資』とも共通する。また、「縛」は現代北京語ではfuと発音されるがこの字もやはり宕摂入声合口字であり、現代北京語での発音が例外的であると言える。それに対して『対音協字』に見られるfoという表記が規則的な音である。『合併字学集韻』ではfuoという音の他にfuという音を載せ、現代北京語に対応する新しい音が見られるが、『西儒耳目資』では他の宕摂入声字と同じ韻母で収めており、fuに対応する音は見られない。

このようにみても、mo、fe、foにおける臻摂由来字に注目する必要があることがわかる。

8) 『汉语官话方言研究』によれば、両地点とも「出」[tshuəʔ]、「拙」[tshuəʔ]、「国」[kuəʔ]とある。

9) 『四声通解』においても「画」にxua、yui?の2音が見られるのに対し、「劃」にはxui?のほかに「今俗音」としてxuai?という音を載せるものの、xuaという音は見られない。このxuai?という音は『中原音韻』で「劃」が皆来韻に収められていることと対応する。

現代北京語においては、一部の例外はあるものの基本的には臻摂唇音字のうち没韻字はoと、物韻字はuと発音される。以下これらについてそれぞれ見てみたい。

表30 e, oで示される臻摂唇音入声字¹⁰⁾

漢字	対音協字	中古韻母	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(142) 没	mo	没	mu, muo	mó ¹¹⁾	mo, mu	mo, mei
(143) 弗	fe	物	fu	fó		fu
(144) 拂	fe	物	fu, fuo	fó	fu	fu
(145) 佛	fo	物	fu, fuo	fó	fo, fe	fo, fu

(142)「没」は中古没韻字であり、現代北京語ではmo, meiの2音を持つ。『広韻』には莫勃切のみ載せ、これは前者の音に対応する。副詞としては後者で発音されるが、この音は新しい音であると考えられその由来については後続する機会の多い「有」との合音説が有力であるが、今までのところ定説を見ない。少なくとも『対音協字』にはmeiに対応する音が見られないことのみ指摘しておく。『対音協字』に見られるmoという音は、現代北京語と対応するが、中村(2004a: 3)によれば、『対音協字』を収める『新刻清書全集』に含まれる別の資料「滿漢切要雜言」においては「没」はmuが一般的であり、meも部分的に見られるという¹²⁾。同じ全集に収められている資料でありながら、表記は多様である。『合併字学集韻』においてはmuo, moの、『清文鑑』においてもmo, muの2音が見えることから、ゆれのある字であったことがわかる。

(143)「弗」は分勿切(非母)、(144)「拂」は敷勿切(敷母)、(145)「佛」は符勿切(奉母)であり、いずれも物韻字である。軽唇音化の結果、いずれも同じ声母となり、また、韻母が同一であることから、声調を除き同韻母となることが想定されるが、現代北京語では(143)「弗」、(144)「拂」はfu、(145)「佛」はfoと発音される。「佛」が他の物韻字と異なる音であったことは『中原音韻』でも同じである。『中原音韻』では(144)「拂」、(145)「佛」は共に魚模韻に収められるが、(145)「佛」については魚模韻のほか歌戈韻にも見られる。一方、『対音協字』ではfuとfoではなく、feとfoに分かれる。これについては、そもそもfeと表記される曾梗摂入声字がなく、4.2. で見た宕摂、山摂入声字である「鞞」「濶」が想定されるk'oではなくkuweという音で収められたことと並行しているとも考えられる。すなわち、feとfoが実質的な音の違いを表すのではなく、一種の表記のゆれであるというものである。これに従うのであれば、fe, foはいずれも/fo/を表していたということになる。『合併字学集韻』では(144)「拂」にfuoという音も載せ、これと矛盾しない。ただ、このように考える場合、やはり

10) 本表で対照に用いる資料では論考と直接関連する音のみ載せる。例えば「拂」には「弼」に通じる用例があるが、これに対応する音が『対音協字』には見られないため対比する各資料においてもそれらを示す音は掲載しない。

11) ここに挙げたó(入声次)は音韻表記ではなく、『西儒耳目資』に書かれた韻母をそのまま記したものである。このóについて、叶宝奎(2001: 127)では羅常培(1930: 284)の「明末の普通音或者讀作[o][u]之間的音、所以金氏把牠們標作o的次音“ó”韻」を引き、[oʔ/uʔ]と2音を載せている。また、曾曉淪(2004: 27)ではóに対する分析の後に「ó次”拟作比[o] 開口稍小的[o] 便理所当然了」と結論づけている。このように、óをどう考えるかは論が分かれるためである。

12) この「没」におけるmeという表記について中村氏は、宕摂入声字との関係には触れていない。中村(2004b)には「滿漢切要雜言」に記載された語彙及び滿洲語注音のローマ字転写が掲載されているが、それを見た限りでは「滿漢切要雜言」にはme, moの音を持つ曾梗摂、宕江摂、あるいは山、臻摂唇音入声字は「莫」のみ見られ、moと示されている。

なぜこのようなことが起こったのかはなお解決すべき問題として残る。なお、『西儒耳目資』では上に挙げた4字すべてについて韻母 o で表している。この韻母は上に挙げた没韻、物韻字に限らず通撰入声字も含み、例えば『西儒耳目資』では(142)「没」は通撰入声字「木」「目」などと、(143)「弗」、(144)「拂」(145)「佛」は通撰入声字「福」「服」などと同音である。『対音協字』ではこれら通撰入声字は mu 、 fu という音であり、『西儒耳目資』とは異なる。

4.4. 没韻唇音入声字について

(142)「没」に関連して、その他の没韻唇音字もあわせ見ておきたい。

表31 没韻唇音入声字

漢字	対音協字	四声通解	合併	西儒	現代北京音
(142) 没	mo	mu?	mu, muo	mó	mo, mei
(40) 勃	pu	bu?, 俗bo?	pu, p'u	p'ò	po
(41) 渤	pu	bu?, 俗bo?	pu	p'ò	po

(142)「没」を含め『対音協字』に現れる没韻唇音入声字は以上の3字である。現代北京語では没韻入声字は唇音以外の「突」「骨」などは u と、唇音字は o へと分化した、とまとめることができるが、歴史的な資料における状況を見るとその分化の段階を知ることができる。中古並母字でありながらいずれも声母が p であることについては3.3.1.において『西儒耳目資』や現代諸方言との対応を指摘した。改めて韻母についてみると、『四声通解』では『洪武正韻』に基づく正音として唇音についても他の没韻字と同じ u という音を示しているが、(40)「勃」、(41)「渤」を含む並母字については実際の北方語音である俗音として o という音も示している。(142)「没」については俗音を載せていない。このことから、現代北京語に共通する分化が一部で起こっていたことがわかる。『合併字学集韻』では(40)「勃」、(41)「渤」において puo という音は見られず、また、他にも「孛」を構成要素に持つ多くの字を pu として収めるが、『広韻』でこれらと同音である「孛」「駢」や「脬」の異体字である「頓」、『集韻』で同音である「鏹」には puo という音が見られる¹³⁾。一方、『西儒耳目資』では(40)「勃」、(41)「渤」についても複数の音は見られず、「突」「骨」などと同韻母である。

4.5. 果摂一等牙喉音字について

中古果摂一等牙喉音字も『対音協字』と現代北京語では様子が異なる。『合併字学集韻』では開合を分け、現代北京語でもこれらの字は開合に分かれるが、『対音協字』ではいずれも o という韻母に収める。果摂字に合流した宕江摂、山咸入声字もそのほとんどが開合にかかわらず o に収められる。実際に『対音協字』に見られる諸字は以下の通り。

表32 『対音協字』に見られる果摂字及び宕江、山咸撰入声字¹⁴⁾

対音協字	果摂	宕江撰入声	山咸撰入声
g'o	(開) 哥歌箇 (合) 戈菓過果鍋	(開) 各閣 (合) 郭	(開) 葛鶴
ge			(開) 葛

13) 「孛」「駢」「脬」「鏹」には pu という音も見られる。

14) 表中の(開)(合)はそれぞれ中古音の開口、合口に基づく。「窩」は『広韻』『集韻』には見られない。『四声通解』、『合併字学集韻』では合口であるためここではこれらに従った。

対音協字	果摂	宕江撮入声	山咸撮入声
k'o	(開) 可苛珂柯軻 (合) 科課		(開) 渴磕
ho	(開) 河何荷賀 (合) 禾火禍	(開) 鶴壑 (合) 霍藿	(開) 渴合盍闞褐 (合) 活
o	(開) 我鵝峩俄娥阿 (合) 倭臥訛窩	(開) 惡鄂鶻	
e			(開) 遏

『対音協字』では中古開口字「葛」をg'o, geの2音に、また、「遏」をeに収め、山撮入声字であるこの2字のみ例外的であると言える。『合併字学集韻』上のような開合不分について、中村(2006a:1)では、『対音協字』を含む『新刻清書全集』における例を挙げ、「宣教師資料と共通する南京音的な特徴と言える」と述べている。なお、『満文金瓶梅』(1708年序)では、これら果撮字等はoと表記される字が多いが、「歌」「閣」など一部の字にはg'oのほかにもgeという表記も見え、「哥」についてはgeという表記のみ見られる。また、『清文啓蒙』、『御製増訂清文鑑』では開口をe, 合口をoと表し、開合の区別がはっきりとする。

4.6. 入声字に見える層について

現代北京語においては、主に宕江撮、曾撮、通撮入声字に文白異読が見られるが、『対音協字』に見られるのは文読音に対応する音がほとんどである。『対音協字』での現代北京語との対比は以下の通りである。

表33 宕江撮入声字

	現代北京語	例字
o	文: ɤ, o, uo	o悪顎鶻, no諾, ho霍鶴壑藿, bo博剥薄泊, lo洛落絡樂烙駱, mo莫, co戩綽, jo卓捉勺 酌濯涿, g'o郭各閣, tso碯錯, dzo作昨, zo弱若
oo	白: au	なし
iyoo	文: ye	yo岳約樂鑰籥, siyo削, liyo略, ciyo雀鵲, jiyo爵嚼, ciyo却卻確, giyo覺脚角, hiyo学
iyoo	白: iau	なし

宕江撮入声字においては、いずれも現代北京語の文読音に相当する音のみが見られ、白話音に対応する音は見られない。これは南京音を示す『西儒耳目資』と同様であり、『合併字学集韻』に文白それぞれに対応する二種類の音形が豊富にみられるのとは対照的である。

表34 曾撮開口一入声字

	現代北京語	例字
e	文: ɤ, o	be北, se色, le勒, ce策測側敕, ke刻尅克, he国劓, dze則
ei	白: ei	dzei賊

曾撮撮開口一等における状況も同様である。このうち白話音に対応する音で示されたのは「賊」の1字である。この「賊」という字は、『満文三国志』でも『対音協字』と同様に、曾撮開口一等字がほとんど文読音に対応する音で表記されながら「賊」のみdzeiと表記される。一方『満文金瓶梅』では文読音に対応するdzeと表記され、また、『御製増訂清文鑑』ではdze, dzeiが共に現れ、前者の出現箇所が多いことから、白話音に対応する音が常に優勢であったというわけでもないようである。

表35 曾撰開口三等莊組および梗撰開口二等入声字

	現代北京語	例字
e	文：v, o	be白白帛栢, pe迫魄拍珀, me麦墨黙陌鶯脉脈, je沢沢翟摘責, ke客, ge革格隔隔隔, he赫覈嚇核, dze側
ai	白：ai	jai宅

曾撰開口三等莊組および梗撰開口二等字もこれまで見てきた諸字と同様である。ここでは白話音に対応する音は「宅」のみである¹⁵⁾。『西儒耳目資』ではこの字は『対音協字』でjeと表記される「沢沢翟摘責」と同音であり、『対音協字』で「宅」のみjaiという音で収められる理由は不明である。

通撰入声字のうち、三等韻由来の字については、現代北京語では一部の字に限り流撰由来字と同じ韻母となる白話音が見られるが、『対音協字』ではそのような字は少ない。高晓虹(2009: 41)では通撰合口三等字の白話音を持つ字として、「軸」「粥」「熟」「肉」「六」「宿」の6字を挙げるが、『対音協字』に現れるのはそのうち「肉」「宿」の2字であり、前者が現代北京語の白話音と対応する。

表36 通撰合口三等入声字

	現代北京語	例字
uo	白：ou	zuo肉

『対音協字』ではi介音を伴わない流撰字、あるいは入声由来字は一般的には例えば「周」jeo, 「楼」leo, 「狗」geoなどeoと表記され、声母が日母に由来するzの場合のみeoではなくuoと綴られる。このuoという表記はeoと音韻上の区別がなく、『満文三国志』でも「柔」にはžeo, žuoの表記がともに見える。また、他にはもっぱら「紂」に対するjeoとjuo, 「首」「寿」に対するšeoとšuoなど、知章組の限られた声母に見られ、いずれも出現回数は少ない。一種の表記のゆれと考えられるだろう。このuoという表記はやがて使用されなくなり、『御製増訂清文鑑』、『音韻逢源』ではこの綴りで表される字は見られない。

もう一つ挙げられた「宿」については、『広韻』には通撰の息逐切のほか、流撰の息救切にも「星宿」の意味として収めているため、『対音協字』のようにそもそも声調の表記がない単字を挙げ、その音を見ただけでは入声由来の白話音なのか、流撰由来なのかは判断がつかない¹⁶⁾。『対音協字』ではこの字は白話音に対応する音あるいは流撰由来の音は見られず、「序」や「徐」などと共にsioiという音で収めている。この音は現代北京語のcyに対応し、現代北京語の文読音であるsuとは異なる音を表すものである。現代北京語では通撰三等入声字のうち、舌歯音は「続」がcy, 「縮」がsuoと発音される他はuと発音される(王力1980: 167)。改めて『対音協字』に見られる他の通撰三等入声心邪母字を見てみたい。

15) 現代北京語に見られる「隔」[tɕie], 「客」[tɕʰie]に対応する音も見られない。

16) これに対し『中原音韻』では「宿」は、魚模韻の入声作上声、尤侯韻の入声作上声、尤侯韻去声に収め、それぞれ通撰由来の文読音、通撰由来の白話音、流撰由来の音と判断することができる。また、現代北京語においても通撰由来の白話音は第3声、流撰由来の音は第4声で区別し発音される。

表37 通撰三等入声心邪母字

漢字	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(146) 宿	sioi	su, sy, siou ¹⁷⁾	só	su	su
(147) 肅	su	su	só	su	su
(148) 夙	su	su	só		su
(149) 粟	su	su	só	su	su
(150) 俗	su	su, sy	só	su	su
(151) 続		su, sy	só	sioi	sy

(151)「続」は『対音協字』には見られないが、対比のためにあわせて掲載しておく。『西儒耳目資』では牙喉音を除く他の通撰三等入声字と同様の韻母であり、『対音協字』で2種類に分かれるのとは異なる。牙喉音である「菊」「曲」などはioという韻母である。一方、『合併字学集韻』では現在cyと発音される(151)「続」をそれに対応するsyという音で収める他に、(146)「宿」、(150)「俗」にもsyという音が見られる。『対音協字』で(146)「宿」をsioiという音で収めているのはこれと関連するものであると言えよう。また、『滿文水滸伝』(雍正頃か)でも「宿」をsu, sioiの2音で綴っている。時代が下った『御製増訂清文鑑』では現代北京語と同じ音でそれぞれの字を収めている。この点については、南京音の特徴と異なると言える。

また、その他に「緑」も現代北京語においてはly, luの2音が見られ、これらは共に文読音である。『合併字学集韻』にもly, luの2音が載せられているが、『対音協字』ではluのみ見られる。

4.7. 通撰および曾梗撰唇音字について

現代北京語では通撰唇音字は唇音以外の字と異なり、曾梗撰字と同じ韻母で発音される。それらの字について『対音協字』を見るとb, p, mではその由来にかかわらず現代北京語と同様にengが後続し、通撰のみからなるfではungが後続する。

表38 通撰および曾梗撰唇音字

声母	対音協字		合併		西儒		現代北京語	
	通撰	曾梗撰	通撰	曾梗撰	通撰	曾梗撰	通撰	曾梗撰
p	beng		puŋ		puŋ	pəŋ	pəŋ	
p'	peng		p'uŋ		p'uŋ	p'əŋ	p ^h əŋ	
m	meng		muŋ		muŋ	məŋ	məŋ	
f	fung		fiuŋ ¹⁸⁾		fuŋ		fəŋ	

このように見てみると、『対音協字』に見える音は『合併字学集韻』とも『西儒耳目資』とも異なる類型であると言える。以下では参考までに、いくつか具体的な字を選び、各種満洲資料における表記を挙げておく。

17) ここに挙げた『合併字学集韻』に見られるsiouは上声であり、「俗用歇宿」とあるため通撰由来の白話音であると考えられる。『合併字学集韻』には他にも流撰由来であるsiou去声「星宿、又宿留」も見られる。

18) 『合併字学集韻』では(合併)非母字はこの韻母に限らずi介音を伴う韻母の一つとして並べられる。例えば(合併)干韻では韻母anと組み合わせる声母を先に並べ、続けて韻母ianと組み合わせる声母が並べられる。「番」など(合併)非母字は後者に含まれる。

表39 各種満洲資料における通撰および曾梗撰唇音字に対する表記

漢字	対音協字	満文三国志	満文金瓶梅	清文鑑	音韻逢源
崩(曾撰)	beng				beng
綑(梗撰)				beng	beng
蓬(通撰)	peng		peng	peng	pung
彭(曾撰)	peng	peng	peng	peng	peng
夢(通撰)	meng	meng		meng	mung
孟(梗撰)	meng	meng	meng	meng	meng
風(通撰)	fung	feng多, fung	fung	fung多, feng	fung
封(通撰)	fung	fung多, feng	fung	fung多, feng	fung

資料により現れる字が異なるため、対比ができない部分があるが、ここに挙げた字のほかにも、『音韻逢源』を除くそれぞれの資料では**bung**, **pung**, **mung**という表記はまったく見られない。そして『対音協字』と最も時期に近い『満文金瓶梅』の状況は『対音協字』と完全に一致する。声母fには通撰と対になる曾梗撰字がないため、他の3種類の声母とは異なる表記がなされたのであろう。また、興味深いことに最も遅くに作られた『音韻逢源』のみ中古音の由来により韻母が分かれていることがわかる。これは韻書であるという規範意識による人為的な区別であると考えられる。

4.8. 合口灰韻字の開口化

現代北京語では中古合口であった灰韻字のうち、唇音字「杯」「陪」「梅」及び泥来母字「内」「雷」などではu介音がなくなった。『対音協字』でも同様にこれらの字はejという綴りで韻母が表される。『合併字学集韻』もこれらの字を開口として収めており、『対音協字』と一致する。一方『西儒耳目資』では他の合口字と共にuiという音として並べられ、それと異なる。これらの字音についていえば、南京音とは異なる様子をはっきりと見て取れる¹⁹⁾。

4.9. 流撰明母字

現代北京語において、流撰明母字には他の流撰字と同様であるou, iouのほかに遇撰字と合流したu, さらには梗撰字と合流したau という韻母が見られ複雑である。これらの字について『対音協字』における音を見てみたい。

表40 流撰明母字

侯韻 ²⁰⁾ (一等)	mu(上)母牡某畝, meo(去)懋茂
尤韻(三等)	meo(上)眸謀
幽韻(三等)	mio(去)謬繆

このように見てみると、侯韻上声は**mu**となり、去声及び尤韻は**meo**と、幽韻字は**mio**と分かれていることがわかる。そのうち現代北京語と異なる音で示されたのは(152)「某」、(153)「懋」、(154)「茂」の3字である。これらについて、他の資料と比較して見てみたい。

19) なお、現代南京語では唇音字はu介音のない[əi]という韻母で発音されるが、泥来母字は「内」[nuəi]、「雷」[luəi]などとu介音を伴った韻母で発音される。

20) ここでいう侯韻とは相配する厚韻、侯韻を含む言い方である。他も同じ。

表41 「某」「懋」「茂」

漢字	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京語
(152) 某	mu	muou, mu	meu, mu	meo	mou
(153) 懋	meo	muou, mau	meu		mau
(154) 茂	meo	muou, mau	meu	mao	mau

(152)「某」は『広韻』では表40に挙げた「母」「牡」「畝」²¹⁾と同音であり、現代北京語におけるmouという音は他の流摂字と同じでありながら例外的であると言える。『合併字学集韻』『西儒耳目資』ともに2音を載せている。

(153)「懋」、(154)「茂」のauという韻母は『西儒耳目資』に見られず『合併字学集韻』のみで見られる。『中原音韻』では(153)「懋」は侯尤韻に収めているが(154)「茂」は蕭豪韻に見られることから、このような音は以前から存在していた音であったと考えられる。

4. 10. 鼻音韻尾

現代北京語においては通江宕梗曾の5摂に由来する字はŋ韻尾で発音され、臻山深咸の4摂に由来する字はn韻尾で発音される。原則としてはこのような対応関係にありつつ、一部の字には例外も見られる。

4. 10. 1. 曾梗摂字に見えるn韻尾

現代北京語において「貞」「粵」「肯」を構成要素に持つ一部の曾梗摂字が例外的にn韻尾で発音されることはよく知られている。これについて王力(1980:192)では「貞」「肯」を例に挙げ、方言の影響を受けた可能性があることを指摘している。ここではまずは曾梗摂字でありながら『対音協字』でn韻尾を持ち、他の資料あるいは現代北京語にもn韻尾が見られる字について見てみたい。

表42 n韻尾を持つ曾梗摂字

漢字	対音協字	合併	西儒	現代北京音
(155) 聘	pin	p'iəŋ, p'iən	p'iŋ	p ^h iŋ
(156) 娉	pin	p'iəŋ, p'iən	p'iŋ	p ^h iŋ
(157) 枹	pin	iəŋ, tɕ'əŋ	iŋ	iŋ
(158) 貞	jen	tɕəŋ, tɕən	tɕiŋ	tɕən
(159) 禎	jen	tɕəŋ	tɕiŋ	tɕən
(160) 禎	jen		tɕiŋ	tɕən
(161) 肯	ken	k'ən	kəŋ	k ^h ən
(162) 措	ken	k'ən		k ^h ən
(163) 馨	hin	hin, hiŋ	hiŋ	cin
(164) 亘	gen	kən, kəŋ	kəŋ	kən

上の表からわかるとおり、ここに挙げた10字のうち9字が『西儒耳目資』に収められているが、『西儒耳目資』においてはいずれもŋ韻尾として収めており、n韻尾の音は見られない。そのため以下では『合併字学集韻』との対比を中心に分析を進める。

『対音協字』に見られる「粵」を作りを含みn韻尾として収められた字は(155)「聘」、(156)「娉」、(157)「枹」の3字である。このうち(157)「枹」は中古以母字であり、『対音協

21)「畝」は『広韻』では「畝」という字体で収める。

字』以外の資料ではそれに対応した音として収められる。この字を『対音協字』でpinという音で収めるのは、他の2字の類推によるものであろう。(155)「聘」は『満文三国志』においても出現箇所すべてでpinと表記され、この字がpinと表記される字であるという認識は定着していたようである。(156)「娉」については現代北京語においてpʰiŋと発音されることから、『対音協字』におけるpinという表記は(155)「聘」の類推とも考えられるが、『合併字学集韻』では(155)「聘」と共に(156)「娉」にもpʰiənという音も見えることから、実際にこの2字が共にn韻尾で発音されていたとしても不自然ではない。

「貞」を含む字については、『対音協字』には(158)「貞」、(159)「禎」、(160)「禎」の3字が見られる。このうち(158)「貞」については、『合併字学集韻』にもn韻尾の音があり、また、『満文三国志』でも複数箇所で見られ、jengという表記見られないことから、実際の音を表したものであると考えてよさそうである。一方(159)「禎」、(160)「禎」については『満文三国志』でもjenと表記されるがそれぞれ一回ずつに限られること、また、『合併字学集韻』にもn韻尾の音が見られないことから、『対音協字』、『満文三国志』いずれにおいても(158)「貞」の類推による表記であるという可能性も否定できない。

(161)「肯」、(162)「搆」はいずれも『合併字学集韻』にn韻尾の音は見られず、n韻尾として収めている。また、(161)「肯」についてはすでに『中原音韻』において真文韻字として「懇」「墾」「齷」と並べて収められていることから、この字がn韻尾として発音されるようになったのは上に挙げた他の字より早かったということがわかる。(162)「搆」もやはり『合併字学集韻』にn韻尾として収められる。

(163)「馨」、(164)「亘」についても『合併字学集韻』にn韻尾としての音が収められていることから、『対音協字』でのn韻尾もそれと対応するものであろう。

『対音協字』には他にも曾梗摂字でありながら、n韻尾として収める字がいくつか見られる。具体的には「亨」「哼」がhenと表記されされている。また、「精」にはjingのほかにjinという音も見え、同様に「氷」にもbingとあわせてbinという音でも収めている。これらの字におけるn韻尾はいずれも他の資料に見られないため、方言音、あるいは誤認によるものであると考えられる。

4. 10. 2. 臻咸摂字に見えるŋ韻尾

上と反対に、n韻尾として収められることが想定される臻咸摂字がŋ韻尾として収められた例も見られる。「狠」はhenのほかにhengにも見られる。諸資料にはこれに対応する音が見られないことから取り違えと考えられる。また他にkivanという表記が想定される「黔」をkingという音で収めているが、これについては主母音が異なることから韻尾の取り違えではなく、そのような音で表される「黥」の書き間違いであるとみられる。『対音協字』には「黥」が見られず、「黔」は「鯨」の後ろに書かれている。

4. 11. 同一韻母に対する表記のゆれ

『対音協字』では、同一韻母を表す際に複数の満洲字表記が用いられることがある。以下ではそれらについてみてみたい。

4. 11. 1. ooとao

効摂字に対しては、『満文三国志』など初期有圈点資料においてはk, gを除いてooと記されることがほとんどである。『満文金瓶梅』ではooが多数を占める一方、aoという表記もいくつ

かの箇所において現れ、その反対に『御製増訂清文鑑』ではaoが主流でありながら一部にooが見られる。『音韻逢源』に至るといずれもaoと記されることとなり、ooからaoへと表記が移行する流れを見てとることができる。『満文三國志』と『満文金瓶梅』の間に当たる『対音協字』での表記は以下の通りである。なお、i介音を伴う表記も基本的には平行しているが、『対音協字』ではすべてiyooでありiyaoという表記は見られない。

表43 『対音協字』におけるooとao

oo	oo, noo, boo, poo, soo, šoo, too, doo, loo, moo, joo, tsoo, dzoo, žoo
ao	hao, cao, k'ao, g'ao

『対音協字』では時期に近い『満文金瓶梅』と似た様子を呈しており、ooを中心としつつ、aoも見られるようになってきた、と考えられるだろう。ただ、なぜhとcに後続する韻母に限りaoと表記されるようになったのか、その判断は難しい。『満文金瓶梅』ではhao, mao, nao, šaoおよびi介音を伴ったgiyaoが現れる。『満文金瓶梅』のほうがさらに一歩進んだ段階であると言えよう²²⁾。そもそもなぜ効撰字に満洲字ooが用いられるかということについては、以下の早田(1990: 2)における記述が参考になる。

なお満洲文字では、普通、[io] と [iu], [eo] と [eu] は書き分けず、常にそれぞれ io, eoと書かれる。即ち、文字列gioは [gio] でも [giu] でもありうるが、寧ろ [giu] であろう。eoも同様に [eu] であろう。同じく文字列ooも [ou] 或は [ou] と考えられる。

これによると、満洲字ooの綴りが表す音は [ou] や [ou] であったということである。つまり、『満文三國志』など初めは効撰字をoo ([ou] ~ [ou]) と認識し、後にao ([au] あるいは [ao]) へと交替したと考えることができる。鋤田(2015)において『満文三國志』における漢字音表記が北京方言や南京方言ではなく、膠東方言と関連があることを指摘した。現代北方方言においても例えば膠東方言区である諸城(膠遼官話青萊片)や隣接する地域の濟南(冀魯方言石濟片), 河間(同滄惠片), 利津(同章利片)などで効撰字が [ɔ] と発音される地点があり、このような音に基づく表記であるとも考えられる。このような音から、北京音や南京音に見られる [au] に基づく表記へと移り変わったというわけである。

4. 11. 2. yuwanとiowan

『満文三國志』など初期有圈点資料では、山撰合口三四等由来の零声母字、「袁」「原」などはほとんどyuwanと、ごく稀にiowanと表記され、いずれも同音を表す表記のゆれであると考えられる。しかしながら『対音協字』ではそれと異なり、この2種類の綴りそれぞれに異なる字を収めている。実際の例を挙げると以下の通りである。

22) 『満文金瓶梅』にはそれぞれhoo, moo, šoo, giyooも見られ多数を占める。nooは見られないが、同音を示す字の出現箇所がそもそも少ない。

表44 『対音協字』におけるyuwanとiowan²³⁾

yuwan	(陰平) 淵 (陽平) 元 圓 員 爰 媛 袁 源 源 嫫 (去声) 院 園 苑 瑗
iowan	(上声) 遠 (去声) 怨 願 愿

(下線は中古疑母字)

このように見てみると、分化条件を見いだしづらいが平声字はyuwanのみであり、上声字は1文字のみであるがiowanと表記され、去声は二つに分かれることがわかる。あるいは声調による聴覚印象の違いが関係しているとも考えられる。なお、山撰合口三四等の入声由来字も『滿文三國志』などでは並行した状況が見られ、yuwaiあるいはyuweiが多く現れ、ごく稀にiowaiあるいはioweiが現れるという表記のゆれが見られるが、『対音協字』で用いられるのはioweiのみである。

4. 11. 3. unとuwen

『対音協字』に見えるunとuwenも同じような同一の韻母を表す表記のゆれであるとみられる。uunとuuwenは他の声母に後続するun及びuwenとは漢語音韻上は区別されるが、満洲字による綴りは同一であり、ゆれも同じように起こる。一般的に満洲字による漢字音表記にはunが主に用いられ、稀にuwenと表記されることがある。『対音協字』における状況をまとめると以下ようになる。なお、ts, dz, z, nにはunのみ後続し、uwenが後続した綴りは見られないため表からは省略する。そのうちnunは現代北京語では見られない音節であるため、これについては後述する。

表45 『対音協字』におけるunとuwen

	h (ūn, ūwen)	s	ś	t	d	l
un	昏葷魂混	孫損遜選蓀蓀	舜瞬順純馴淳	吞屯豚	頓敦墩遯囤	
uwen	昏	蓀	馴	囤	磳	輪論崙綸綸倫
	c	j	k	g	y	
un	春蠢椿醇唇	準準脛諄隼	坤綱困昆崑摑闊 壺琨	袞滾鯁棍	雲允韻云運醞韞 緼暄孕溫勻氈	
uwen	蠢	屯	琨	棍滾	囊	

『対音協字』においてもunと綴られる字が多く、uwenと綴られる字が少ないのは他の満文資料に見られる傾向に合致する。『対音協字』でに後続する綴りがuwenに限られるというのは特徴的であるが、『対音協字』より先に作られた『滿文三國志』や後に作られた『御製增訂清文鑑』いずれでもlunという表記が見られる一方で、luwenと表記される割合が他の声母より明らかに高く、声母がlである場合に他とは異なる傾向が見られる。上の表を見ると、「蓀」「馴」「蠢」「琨」「滾」はun, uwenの両方に収められており、また、このうち「蠢」「琨」などは複数の音はなく、また、uwenと表記される字の声調にも偏りが無いことから、どのような際にuwenと表記されるのか、その条件を見いだすのは難しい。uwenと綴られる字には常用字

23) 声調は中古音のものではなく、当時の北方語音としてのものである。また、『広韻』に複数の音が見られる字、例えば「媛」は『広韻』には王眷切「淑媛」、雨元切「嬋媛枝相連引」の2音を収めるが、本表では代表的な音に従い分類した。なおyuwanには中古曉匣母字である「眩」「懸」「鉉」「喧」「萱」が含まれるが、本表では省略する。声母については3. 5.を参照。

は多くなく、あるいは後に現れるuwenという綴りに字を書き足したのかもしれない²⁴⁾。

続けて上の表に含まれ個別に説明が必要である3字に、現代北京語ではnənと発音されるが『対音協字』ではnūnという音で収める「嫩」を加え以下に取り上げたい。

表46 unと表記される個別字

漢字	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(165) 遜	sun	sun, syn	sun	siyūn	cyn
(166) 選	sun, siowan	syān, şua, suān	siuən	siowan	cyan
(167) 馴	şun, şuwen	syn, yn, tş'uən, şuən	siun	siyūn	cyn
(168) 嫩	nun	nuən	nun	nun, nuwen	nən

(165)「遜」は『広韻』蘇困切、一等合口であり現代北京語におけるcynという音が例外的であると言える。『合併字学集韻』には2音を載せ、現代北京語と同じような音が存在していたことがわかる。一方、『西儒耳目資』に見られるのは『対音協字』と同様に『広韻』に対応する1音のみである。なお、『満文三国志』では(165)「遜」をすべてsiyūnあるいはsiyūnと表記しており、『対音協字』との違いが見られる。

(166)「選」はここに挙げたsunの他にsiowanにも見られる。『広韻』には思兗切、息絹切の2音を載せ、いずれも後者に対応し、前者の音は見られない。『集韻』には他に損管切、数滑切も見られるが、やはり前者に対応する音ではない。この音で表されると考えられる「選」などの誤記とも考えられる。

(167)「馴」は『広韻』詳遵切であり、「旬」などと同音字としてsiyūnという音で収められることが想定されるが、『対音協字』では異なった音として収めている。満洲字による漢字音表記では、特に有圈点資料の早期にsiy-とş-の混用が見られることからその名残とも考えられる²⁵⁾。しかしながら『対音協字』はそれより後の資料であること、他に同様な例が見られないこと、şun, şuwenの2箇所に見られること、また、『合併字学集韻』に対応する音が存在することから、表記の混用によるものではなく、実際の音に基づいたと考えられる。

(168)「嫩」は『広韻』奴困切と合口であり、『合併字学集韻』、『西儒耳目資』のほか『御製増訂清文鑑』においてもu介音を持ち、『対音協字』と共通する。この字については『語言自邇集』でもnənとnunの2音が見られ、u介音が比較的遅い時期まで保たれていたことがわかる。また、現代北方方言においてもu介音を持ち発音される地区も少なからず見られる。

なお、şunに収められた「瞬」は他の資料には見られない字である。『対音協字』には常用字と思える「瞬」が収められていないことからこの字の書き間違いとも考えられるが、字体の差異が大きく断定はできない。

4. 11. 4. fiとfei

現代北京語では唇音声母のうちp, ph, mにはiとeiがそれぞれ組み合わせさり、fiという音節は存在せず、fにはeiのみ後続する。それに対して『対音協字』では他の唇音声母と同様にfi, feiという音が共に見られる。具体的には以下の諸字である。

24) 表45に挙げた諸字の声母についての問題は第3章を参照。

25) たとえば『満文三国志』では、「荀」をsiyūn, siyūnという表記が多数を占めるが、şunやşūnと表記した例も見られる。また反対に「順」をşunやşūnのほかsiyūnと表記した例も見られる。

表47 『対音協字』におけるfiとfei²⁶⁾

fi	(陰平) 非 (陽平) 蜚 (上声) 匪
fei	(陰平) 緋扉非霏飛 (陽平) 肥 (上声) 斐排 (去声) 費廢吠

これらの字は『合併字学集韻』でも『西儒耳目資』でも同一の韻母として収めているため、『対音協字』に見られる2種類の表記も実際の音の区別によるものではなく、同一韻母を表す表記のゆれであると考えられる。この音について満洲資料においてはfeiと表記されるのが一般的であり、『満文三国志』、『満文金瓶梅』、『御製増訂清文鑑』などではfiという綴りは見られない。初期の有圈点資料が基づいた膠東音はfeiであったものの、『西儒耳目資』ではこれらの字の音をfiという音で収めていることから、後にその影響を受け部分的にfiと表記されるようになったためであると考えられる。部分的に留まったのは、fiとfeiの対立がなかったからであろう。なお、『合併字学集韻』ではこれらの字はi韻母を含む(合併)資韻ではなく(合併)灰韻に収められる。

4. 11. 5. manとmuwan

『対音協字』にはmanとmuwanという二種類の綴りが見られるが、後者のmuwanという表記は『満文三国志』、『満文金瓶梅』、『御製増訂清文鑑』などには見られず、そこに収められた字は区別なくmanと表記される。『合併字学集韻』でもそれらの字の韻母は区別されない。また、現代北京語においては同一の韻母となっていることから同一韻母の表記のゆれであるとも考えられるが、『西儒耳目資』では例外はあるものの中古音の等により区別が保たれている。

表48 『対音協字』と『西儒耳目資』の対比

漢字	対音協字	西儒	漢字	対音協字	西儒
蛮 (二等)	man	man	幔 (一等)	man	muɔn
慢 (二等)	man	man	瞞 (一等)	muwan	muɔn
漫 (二等)	man	muɔn	鰻 (一等)	muwan	muɔn
滿 (一等)	man	muɔn	饅 (一等)	muwan	muɔn

『西儒耳目資』では例外も見られるものの二等韻字がman、一等韻字がmuɔnと区別される。その他の唇音字にもこの区別が見られるが、『対音協字』ではmanとmuwanにしか見られない。実際の音の違いを表している可能性をまったく排除できないものの、少なくとも合流が進んだ段階であると見られ、ここでは表記のゆれとして扱っておく。

4. 12. その他

ここまで挙げたほかに個別に説明が必要な字には以下のものがある。

4. 12. 1 個別に当時の音を反映した表記

次に挙げた2字は現代北京語とは異なるが、個別的に当時一般的であったと考えられる音を記したものである。

26) feiには「徘徊」も収められているが例外的な音であるため表には載せず、4.12.3.において個別に考察する。

表49 「横」「入」

漢字	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(169) 横	hūng	xəŋ, xuŋ	xuŋ	heng	xəŋ
(170) 入	zi	zʰ, zʰ	zʰʌ?	zu	zu

(169)「横」、(170)「入」は現代北京語とは異なる韻母で記されているが、いずれも『合併字学集韻』、『西儒耳目資』とは符合しており、当時の一般的な状況を反映したものであるとみられる。

他に、『合併字学集韻』『西儒耳目資』にも見られない音であり、南方方言の影響によると考えられる音もいくつか見られる。

4. 12. 2 呉方言音を反映した表記

これまでは主に『合併字学集韻』が示す北京音と『西儒耳目資』が示す南京音と対照を行ったが、『対音協字』ではそのどちらとも異なる音もいくつか見られる。

表50 呉方言音の影響によると考えられる音²⁷⁾

漢字	対音協字	中州全韻	現代蘇州音	現代北京音
(171) 豁	hūwa	xo, xua	hua?	xuo
(172) 却	kiya, kiyo	k'iau (, 新: 脚kia)	tc ^h ia?	tc ^h ye
(173) 吸	hiyei	xi (, 新: 笈tsie)	ciə?	ci
(174) 虐	niya	niau	ŋia?	nye
(175) 捏	niya	niɛ	ŋia?, ŋia?	nie

(171)「豁」は「活」と同じ山攝合口一等韻字であり、「活」と同様に^hoという音に収めることが想定される。しかしながら実際には^hūwaという音として収められる。これについては明末の范善濤による曲韻書『中州全韻』に同様な音が見られる²⁸⁾。范善濤は蘇州の人であり、『中州全韻』には呉方言の影響も見られ、これもその一つであると考えられる。同様に(172)「却」には、『中州音韻』を元に改訂を加えた清の周昂『新訂中州全韻』に(172)「却」そのものではないものの、声母のみが異なる「脚」にkiaという音が見られる。(173)「吸」も声母のみが異なる「笈」にtsieという音が収められており、これは(173)「吸」のⁱyeiという韻母表記に矛盾するものではない。『中州全韻』、『新訂中州全韻』にみられる呉方言に基づく音は全面的ではない。(174)「虐」、(175)「捏」は共に両書には呉方言音は見られないが、音韻対応から考えれば、その可能性は高いと言えよう。

4. 12. 3 その他、類推、誤認など

これまで『対音協字』に見える漢字音について、様々な角度から分析を進めてきたが、それらでは説明できない例もいくつか見られる。ここではそれらをまとめて見てみたい。

27) (新:)は『新訂中州全韻』における音を示す。

28) 『中州全韻』については緒方(2004a, 2004b)に詳細な研究がある。また、『新訂中州全韻』についても緒方(2008)にて『中州音韻』との対照研究が行われている。現代蘇州音は『蘇州方言詞典』(1998)による。

表51 その他、類推、誤認など

漢字	対音協字	漢字	対音協字	漢字	対音協字
(176) 剖	po	(180) 歉	kiyei	(184) 褻	si
(177) 川	can, cuwan	(181) 涉	jy	(185) 嗟	jioi
(178) 冉	zuwan, zan	(182) 箴	fa		
(179) 鐫	jiyan	(183) 徘	pai, fei		

(176)「剖」は『広韻』に普后切（流撰）、芳武切（遇撰）の2音を載せるが、『対音協字』に見えるpoという音はどちらとも合わない。『合併字学集韻』、『西儒耳目資』あるいは『中州全韻』にも見られない音である。現代方言に目を転じると、西南官話、江淮官話の一部でoという韻母が見られるが、『対音協字』では他の流撰字、あるいは遇撰字にoという韻母は見えず、(176)「剖」のpoという音は孤立した例であり、それとの関連性を判断するのは難しい。

(177)「川」は合口字であり、それに符合するcuwanという音の他にu介音のないcanという音でも収めている。一方(178)「冉」はその反対に開口字であり、それに合致するzanという音が見られる一方で、zuwanという音にも収めている。開合を取り違えた数少ない例であると考えられる。また、(179)「鐫」は『広韻』子泉切であり、jiowanという表記が想定される字である。同様に介音を取り違えた例と思われる²⁹⁾。

(180)「歉」は『広韻』には苦簞、苦減、口陷切の3音が載るがいずれも咸撰であり『対音協字』のkiyeiと合わない。この字の直前に「慊」が置かれている。この「慊」は『広韻』にやはり苦簞切として収められるが、現代北京語ではtɕʰieとも発音され、『合併字学集韻』にもkʰieという音が見られる。(180)「歉」に対するkiyeiという音は「慊」の類推によるものとも考えられる。

(181)「涉」は『広韻』時撰切、丁愜切の2音を載せるがいずれもjyとは対応しない。他の資料においてもやはり『対音協字』に見られる音は載せられていない。『対音協字』では同音字として「陟」が挙げられていることから、この字の類推によるものと考えられる。

(182)「箴」は『広韻』莫結切であり、『対音協字』に見られるfaという音とは一致しない。その理由を探し出すのは難しいが、あるいはfaという音で収められることが想定されるものの、実際には収録されていない「箴」の誤記の可能性も考えられる。

(183)「徘」は『対音協字』にはpai, feiの2音が見られ、前者は『広韻』薄回切に対応する音で、同音であった「裴」「陪」などと分かれ、蟹撰由来の「排」（歩皆切）と合流していた様子を反映している³⁰⁾。ここで問題となるのはfeiという音である。この字をf声母で記した例は他の資料に見られず、「菲」などの類推、あるいは「裴」などに見られるpeiという音を示そうとしたと解釈するほかない。

(184)「褻」に対するsi、(185)「嗟」に対するjioiも他の資料には見られない音であり、共にその由来を探し当てるのが難しい。ただ、声母についてはそれぞれ規則的な対応を示していることから、これらの韻母は個別的な表記のゆれの一種であるのかもしれない。

4. 13. 小結

ここまで『清書対音協字』に見られる漢字音について、その韻母に注目して観察してきた。

29) (179)「鐫」についてはこれと同じ仙韻合口精組字が紅安（江淮官話黄孝片）や昆明（西南官話雲南片）でi介音として発音されるが、それについては指摘するに止めておく。

30) 『合併字学集韻』では「徘」は「裴」「排」とそれぞれ同じ2音を載せる。

声母と同じく、韻母についても南京音と北京音のどちらに基づいた、と単純にいうことはできない。例えば曾梗撰開口入声音では、現代北京語の文読音に対応する音、即ち南京音で収められたものがほとんどであるが、少数に白話音に対応する音、即ち北京音が現れる。また、曾梗撰字に見られるn韻尾を持つ字は、『合併字学集韻』には同様に見られるが、『西儒耳目資』には現れない。また、さらに一部の入声字について呉方言音に基づく表記が見られるのも特徴的であると言える。それらに基づいた説明のできない字はわずかに数字に限られ、全体的に見て『対音協字』における韻母表記は現実の音を忠実に反映したものであると判断することができる。ほかにも、満洲字による漢字音表記そのものについて、例えばooとaoの例を初めとした表記のゆれなどは正に前後の時期の資料を繋ぐ線上にあることが確認された。

5. おわりに

本稿では17世紀後期に編纂された『清書対音協字』に見える漢字音について、声母、韻母に分けその特徴を主に中古音を基準として明末の北京音を代表する韻書『合併字学集韻』、南京音を代表する韻書『西儒耳目資』および現代北京語あるいは現代諸方言などと対照することにより明らかにしてきた。そこから見えてきたのは『清書対音協字』における漢字音表記の多面性である。清朝は入関前、すなわち盛京（現在の瀋陽）を首都としていた時代には膠東方言を基礎とする方言音が通用していたと考えられる³¹⁾。清の入関後、北京を首都とし、言語も方言音から北京で耳にした音へと切り替えられたが、それは必ずしも北京の方言音ではなく、明代から官話として用いられていた南京音であったと考えられる。そのため、『西儒耳目資』との共通性が高いのは当然の結果であろう。一方で、北京音と見られる表記も少なからず現れることも無視はできない。他にも呉方言音と関係するとみられる表記も見られたが、これは編纂に主に関わった凌紹雯が呉語地域の浙江仁和（現在の浙江省杭州市）の人であったということで説明ができる。このように『清書対音協字』は様々な要素が含まれた資料ではあるが、17世紀後期の北方語音の一断面を示す資料として、また、満洲字による漢字音表記の変遷を知る資料として、有用なものであるということが明らかになったと言えよう。

参考文献

- 緒方哲也（2004a）『『中州全韻』音注研究』、『文化』68, pp.242-262。
 緒方哲也（2004b）『『中州全韻』音注研究：音韻表作成のための音韻的考察』、『東北大学中国語学文学論叢』9, pp.137-174。
 緒方哲也（2008）『周昂『新訂中州全韻』の編纂と呉方言』、『東北大学中国語学文学論叢』13, pp.65-93。
 鋤田智彦（2015）『『満文三国志』漢字音の基礎方言』、『中国語学』262 : pp.76-94。
 鋤田智彦（2020）『『清書対音協字』における漢字音（1）』、『アルテス リベラレス』107, pp.93-114
 中村雅之（2004a）『『没（mei）』の成立について』、『KOTONOHA』15, pp. 1 - 4。
 中村雅之（2004b）『『新刻清書全集』所収「満漢切要雑言」について』、『KOTONOHA』25, pp. 1 - 4。
 中村雅之（2006）南京官話を反映する若干の満洲文字資料』、『KOTONOHA』39, pp. 1 - 3。
 早田輝洋（1990）満洲語文語の漢字音について—『満文金瓶梅』を資料として—、『九大言語学研究室報告』

31) 膠東方言に基づく漢字音表記は有圈点満文による記録が始まった頃から、入関後まもない順治7年（1650）に刊行された『満文三国志』に至るまで共通してみられる。

11, pp. 1-8。

北京大学中国语言文学系语言学教研室編(2003)『汉语方音字汇(第二版重排本)』,北京:语文出版社

高晓虹(2009)『北京话入声字的历史层次』,北京:北京语言大学出版社。

耿振生(1992)『明清等韵学通论』,北京:语文出版社。

李榮主編(1998)『蘇州方言詞典』,南京:江蘇教育出版社。

羅常培(1930)『耶穌會士在音韻學上的貢獻』,『歷史語言研究所集刊』第一本第三分, pp.267-338。

钱曾怡主編(2010)『汉语官话方言研究』,济南:齐鲁书社。

王力(1980)『漢語史稿』,北京:中華書局。

叶宝奎(2001)『明清官话音系』,厦門:厦門大學出版社。

曾晓渝(2004)『语音历史探索』,天津:南开大学出版社。

張洵如(1937)『北平音系十三韻』,北平:國語推行委員會中國大辭典編纂處(1973,臺北:天一出版社影印)

Möllendorff, P. G. von. (1892) A Manchu Grammar. Shanghai:Printed at the American Presbyterian mission press.

【訂正・補遺】

前稿(鋤田2020)では『清書対音協字』に見える声母表記について論を進めたが、以下について訂正・補遺を行う。

訂正

『アルテス リベラレス』第107号, p. 98, 表6

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(13) 策	初	ce	ts'ɛ, ts'ai	ts'ɛ?	ce, tse	ts ^h ɛ

(「合併」のts'aiを削除)

補遺

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(186) 敕	初	ce	ts'ɛ			ts ^h ɛ
(187) 猝	清	cu	ts'u		tsu	ts ^h u
(188) 丸	匣	wan, hūwan	uan, xuan	xuan		uan

(186)「敕」は(13)「策」と同じく、初母字であるが現代北京語では非反り舌音であり、対音協字ではcと表記され、『合併字学集韻』と共通する例である。

(187)「猝」は清母字でありながら『対音協字』ではcuという音で収められる。声母字がtsではなくcと表記される例は珍しい。

(188)「丸」は匣母字であり、現代北京語で零声母として発音されるのが例外的である。『対音協字』では他の匣母字と同じhūwanと零声母であるwanの2音が見られる。

(2021年4月13日受理)

【付記】

本稿は、日本学術振興会・2020年度科学研究費助成事業(若手研究)「満洲語文献による中国北方語音研究」(課題番号:20K13022, 研究代表者:鋤田智彦)の研究成果の一部である。